２．NIPPON DATA2010: 新型コロナウィルス感染拡大と生活習慣との関連検討ワーキンググループ

研究分担者　奥田奈賀子[1]（京都府立大学大学院生命環境科学研究科　教授）
研究分担者　岡山　明[2]　（合同会社生活習慣病予防研究センター　代表）
研究協力者　有馬　久富[3]（福岡大学衛生学・公衆衛生学教室　教授）
研究協力者　佐藤　敦[3]　（福岡大学衛生学・公衆衛生学教室　助教）
研究協力者　阿部真紀子[3]（福岡大学衛生学・公衆衛生学教室　助教）
研究分担者　西　信雄[3]　（医薬基盤･健康･栄養研究所国際栄養情報センター センター長）
研究協力者　東山　綾[3]　（和歌山県立医科大学医学部衛生学講座　准教授）
研究協力者　鈴木　春満[3]（和歌山県立医科大学衛生学講座　助教）
研究協力者　谷口　祐一[3]（京都府立大学大学院生命環境科学研究科　講師）
研究代表者　三浦　克之　（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　教授）
[1], ワーキンググループ(WG)リーダー; [2], WG サブリーダー; [3], WG メンバー

【背景】2020 年 1 月に国内での感染者が確認された新型コロナウィルスはその後感染拡大が続き、国民は生活習慣の変更を余儀なくされた。これらによる影響を検討するため、2020 年 11 月実施の NIPPON DATA2010 の追跡調査において、主に緊急事態宣言発令中の生活習慣についての項目を追加し回答を得た。研究班では、リーダーを奥田、サブリーダーを岡山としてワーキンググループ(WG)を構成し、速やかな成果公表につなげることとなった。

【今年度経過】第 1 回班会議（2021 年 6 月 1 日）においてデータセットの解析、論文執筆に参加、協力するメンバーを募った。過去の NIPPON DATA 研究班の研究分担者を含めてメンバー募集の連絡を行ったところ、4 機関より 7 名の研究者が WG メンバーとして参画することとなった。2021 年 8 月 17 日にワークショップをオンラインで開催し、WG の目的、タスクについて確認した。メンバーはそれぞれの所属機関で匿名化データセット解析に必要な倫理審査申請を行い、それぞれ承認を得た後にデータセットが配布されている。

今年度の研究課題として、「新型コロナ感染症流行期における体重変化と生活習慣の関連」、「婚姻状態・同居者の有無別にみた COVID19 流行による生活環境の変化の相違」について解析を進めている。

【研究計画】2021 年実施の追跡調査においては、引き続き生活習慣変化についての質問調査を実施し、高齢者に対しては ADL の調査が実施された。2022 年度以降は、2 年間にわたる生活習慣変化の状況や、2021 年 ADL 調査結果を用いた ADL 低下に関連する属性・生活習慣変化について検討し、論文化、成果公表をすすめる。

【研究結果】新型コロナウィルス感染症流行期における体重変化と生活習慣変化との関連. NIPPON DATA2010, 2020 年追跡調査結果

追跡調査回答者（2020 年 11 月実施、1926 人）のうち、体重変化や生活習慣変化について「分からない」と回答した 116 人を除いた 1810 人を解析対象とした。体重変化（増加[n=436]／減少[n=182 人] vs. 不変[n=1192]）を目的変数、各生活習慣の変化を説明変数とし、調整変数として性、年代、住所地（都道府県）の新型コロナウィルス累計陽性者数四分位（2020 年 5 月 1 日現在）を投入した多項ロジスティック回帰分析を行った。体重増加と身体活動の低下、間食の増加、野菜摂取の低下が有意に関連した。体重減少とは、身体活動の増加と減少の両方、間食の減少、アルコール摂取量の減少と増加が有意に関連した。また、陽性者数の多い都道府県（第 4 四分位）は、体重増加のオッズ比（vs. 第 1 四分位）は 1.92 (95%CI 1.38-2.66)であった。体重が増加した者は、感染者が多く発生した地域で多く、地域で感染者数が多いことは、身体活動量の低下や間食の増加と関連していた。

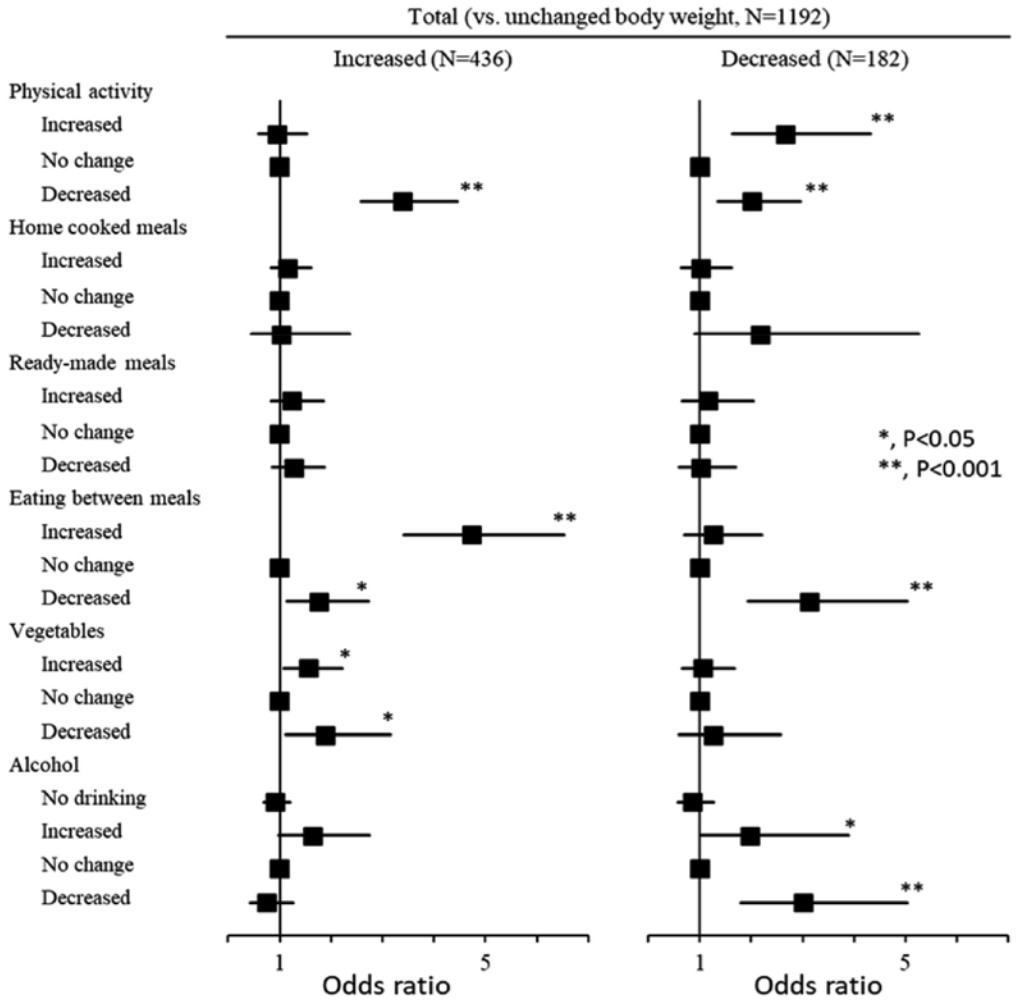

図　体重変化と生活習慣変化の関連，多項ロジスティック回帰分析結果（性、年代、学歴、住所地新型コロナ陽性率四分位を調整）